マミレファシル

比那名居　ななひ

マミレファシル

【プロローグ】

「ほら、ここ」

「すごっ！綺麗だね…」

「外観もだけど、中はもっとすごいよ」

私、江藤真実（えとうまみ）は未踏の領域に誘（いざな）われた。

【第一章】

ボンッ。

手垢で汚れたボールが宙を舞う。

「真実（まみ）！」

速攻のチャンスボール。

でも…。

「友美（ともみ）！」

私に託されたはずのボールを押し返す。

バシッ。

ボールは相手コートに強く叩きこまれた。
「オッケ！ナイス友美！」
テンションを上げるメンバーと対称的に高橋友美（たかはしともみ）はクールに額の汗を拭った。そして私をジッと見ている。私の奥にある真情を精査するように。
三年生がこの夏に引退し、私たちの代となり練習に自然と熱が入る。後輩はいない。私たちがこの学校のバレー部の最後の部員だ。決して強くはない。でも、有終の美を飾りたい思いは部員の身体を、心を動かしていた。
「この夏はさ、バレーに青春かけたいよね」
茹だるような暑さの帰り道、橋本杏樹（はしもとあんじゅ）が目を輝かせながら言った。
「だね。私もみんなのサポートをしていきたいよ」
「いや、真実にももっと前に出てきてほしいよ。今日の速攻のチャンスも友美に渡しちゃうし」
「いや、あそこは友美だよ。わかってるでしょ、友美の凄さは」
杏樹は「あ…、うん…」と言葉を濁した。
私のハンディファンの音が響く。
「友美は何でも容易く出来ちゃうからね」
「そうそう」
首を縦に振る私に、続けて杏樹は言った。
「ね、夏休みの宿題、分担しない？」
へ？唐突な提案に私は一時停止状態。

「バレー部のみんなって、結構勉強ギリギリじゃん」
否定はできない。バレー部は学習成績『中の下』のグループだ。ただ一人を除いては。
「宿題に時間取られて、バレーする時間減らしたくないんだよ。一人一課題で、あとでシェアすればいいんじゃないかって」
昨日寝ないで考えたらしい。国語が得意な文(ふみ)に読書感想文、英会話教室に通っている麗良(れいら)が英語訳を…などと、杏樹はコートさながらの司令塔ぶりを発揮させている。
「えっと、友美は?友美は成績もいいじゃん」
作戦指示の途中で、私は口をはさんだ。
饒舌だった口が一瞬閉じる。
「友美は勉強できるし、一人でやるほうが本人もいいでしょ…」
「何それ?」
眉を寄せながら杏樹に尋ねた。
「いや、友美は良いやつだよ。でも…一匹狼なところあるじゃん。正直、私、付き合い方がよくわかんないんだよね」
友美は容姿端麗、才色兼備。クールな反面、近寄りがたいオーラがあることは私も同感だ。ただ、それだけで誘わないのは…。
「ね、真実って友美とうまく付き合ってるじゃん。あんたから誘ってくれない?」
口をへの字にしている私に、杏樹はグイグイと詰め寄ってきた。
「わ、わかった、わかった。がんばってつなぐサポートするよ」

「サンキュ！あ、あと真実の担当は『地域調べ学習』ってことで」
「え…」
じゃあ、よろしくという杏樹の言葉が薄れていく。
読書感想文はネットで調べれば例文が山のように転がっている。英語の教材も同様だ。しかし、『調べ学習』は、まして「地域の」なんてのは替えが効かない。何をすればよいか全く見当がつかないまま、あれよあれよという間に夏休みは終わりに近づいていった。
「あれ？元気ないじゃん。気合い入れていこうぜ」
シャツの袖を肩までたくし上げた杏樹が練習前にバンバンと私の肩を叩いていった。いや、あんたのせいじゃん！課題達成率はいまだ0パーセント。『中の下』の私には笑っている余裕は皆無だ。ああ！誰か、私を救ってくれ！ギブミー、サポート！心の叫びを外に漏らすことはなかった。積もった不安をボールにぶつけることしかできない。
はあ、と溜息を吐いていると、背中に視線を感じた。振り返ると、友美がまた私をジッと見ていた。そういえば、まだ宿題シェアの話してなかったっけ。まあ、友美は宿題一人でできるだろうけれど。
「えっと…、とも…」
「何に困っているんだ」
呼びかけようとした声を上書きするように友美は私に問いかけた。視線がレーザーのように一直線に私に向かっている。
「えっと…、宿題。調べ学習ができなくて…」
たじろぎながら、返答すると友美がこちらにズンズン近寄って来た。一七五センチを超える身長。その長

く大きな影が私を飲み込んだ。
「私も、調べ学習の途中だ。今日の午後、続きをやろうと思っているから、よ、良かったら一緒にやらないか？」
今日は暑い。午前中から暑いのに、午後からさらに暑くなるとの予報だった。

【第二章】
「ごめんね」
「謝ることなんてない。真実にはいつもサポートしてもらってるんだから、私も真実の役に立ちたい」
「そうかな…。まあ、調べ学習も私が出来ることあったらサポートするよ」
友美は私と目を合わさずにどんどん足を進める。長い脚、広い歩幅に合わせるのはちょっと大変だった。
サポートする。私はこの聞こえがいい言葉をよく使う。正直言うとサポートされる側になりたくない。期待をかけられ、思いを一身に背負うなんて、私には到底無理なことだ。サポートする側になれば、サポートされる側にはならない。波風立たないようにさっと裏側（サポート）に隠れる。私の逃げスキルは高い。
「あそこだ」
友美が長い手を伸ばし指さした方向に大きな建物が見えた。ガラス張りの建物は太陽光を反射し、それ自体が発光体のようにキラキラと輝いている。
「わー、おっきい…。それに新しい感じ」
「最近、立て直しがあったんだ」

「えー、いいなー。私の町の図書館ボロボロなんだけど」
私が住んでいる町の図書館は私が生まれるずっと前からある。小さいときに何回か行ったらしいけれど、記憶にない。ボロボロというのも外観だけで館内はどうなっているかはよく分からない。近代的できらびやかな友美の（町の）図書館と、ボロボロで公民館に毛が生えたほどの私の（町の）図書館は雲泥の差だ。友美と私ぐらい違う。
『図書館へようこそ』と書かれたピカピカのボードを通り過ぎると自動ドアがスッと開いた。冷気が火照った体を包み込む。気分爽快。酷暑の外とは別世界だ。そして、目の前に広がるカラフルな新書の紹介コーナー、奥までずらっとある本棚、そして職員と利用者の多さ。
「すごっ！」
想像をはるかに超える別世界がそこに広がっていた。
「えっと…」
二人揃ってきょろきょろした。私はあまりの異世界ぶりに困惑し、友美は重要なアイテムを探し出すように。
あっ、と友美が言った先に、高く積まれた本が揺れていた。いや、揺れながら動いている。ついに本が自動で戻って行くようになったのかと目を丸くした。
「あら、こんにちは」
高く積まれた本の横からひょっこりと顔が出てきた。
「こんにちは、若葉（わかば）さん」
友美と、私は本のタワーに近づいた。友美が若葉さんと呼んだ人は、友美は勿論、私よりも随分背丈が小

さかった。童顔なこともあって、私たちよりも年下に見える。そんな可愛らしい若葉さんがパワフルに本を運んでいる様子にギャップを感じずにはいられなかった。
「あ、あの、この前の続き、お願いしたいんですけど」
「あ、はい。今日は混んでいるので空いているか確認しますね」
小さい若葉さんは本のタワーを片手に持ち直し、エプロンのポケットからトランシーバーのような機械を片手で操作し始めた。
「よかった。一部屋だけ空いているので、今案内しますね」
そういうと、力強くズンズンと若葉さんは足を進めた。
「あの、よかったら本、持ちますよ」
友美が小声で話しかけた。あ、私も…と思ったが、
「ありがとう。でも、仕事だし、これぐらいなら軽い軽い」
と、お手伝いを褒められた少女みたいにニコッと微笑んだ。本のタワーを支える腕の奥に『司書　若葉芽衣（わかばめい）』と書かれた白い名札が輝いていた。
「では、この部屋で。申込書はこの前と同じように書いていただければ大丈夫です」
本棚の森の奥、そこにある小さな部屋に通された。机と椅子が四つあるだけのシンプルな部屋。若葉さんは用紙を友美に手渡すと、本タワーを片手にいそいそと部屋を後にした。私は連れてこられた猫みたいに両手を膝にのせ、友美が用紙を書くのを横目で見ているだけだった。
友美は用紙を書き終えると、カバンからノートと何枚か紙が挟まれたクリアファイルを机の上に出した。目に入った紙の一枚にはビッシリと文字が書かれていて、思わず「ひっ」と、声が漏れてしまった。

その声に気づいた友美は、
「すごいでしょ。これ、若葉さんのおかげ」
と、紙を摘まんでひらひらさせた。いつもとは違う柔らかな雰囲気だった。
「えっと、あの若葉さんって人に教えてもらうの？」
図書館にいる人って眼鏡でキリッとしてて、落ち着いていて、いかにも『できます』ってイメージがある。現に今さっき見かけた職員さんもテキパキと利用者さんの対応をしてたし、眼鏡率も高かった。でも、若葉さんは…。パワフルだけど、小さいし童顔だし眼鏡してないし…。私が言うのも何だけどきちんと宿題を完成させてくれるのかな…。
「教えてもらうのもだけど、主には資料を集めてもらうって感じかな。レファレンスっていうんだって」
「レファレンス…」
弱々しく呟く。
「今、資料を集めて持ってきてもらえるところ。ネットに載ってないことがたくさん書いてある本がいっぱいあって、私も初めてきたときはびっくりしちゃった」
弾むような声で話す友美につられて、
「へー、すごいね。私もレ、レファレンス？で賢くなっちゃうかな？」
と、お道化（どけ）ると、友美はクスッと口角を上げた。
「ところで、何について調べてるの？」
「んーっ、地域の神社について」
そう言って、机上のノートをパラパラと捲った。さっきの紙同様にたくさん文字が書かれているが、段落

付けされていたり、図が描かれていたりととても見やすい。
「え、すごっ。もう出来てるじゃん」
「いやいや、もう少し詳しく知りたくて。だから若葉さんに頼らないと…。私だけじゃとても無理で…」
「おまたせしました」
ガラガラと音を立て、本が詰まったカートと共に若葉さんが扉を開けた。
「えっと、文献はこれぐらいですかね。後は地域の広報誌にも少し載っているみたいでして―」
若葉さんは、机にこの資料は神社協会に関するもので、歴史文書はこの地域資料に、二〇七ページの資料が参考になるかもなどと一つ一つ丁寧に解説している。友美は、ふんふんと頷きながら、がりがりとメモをとった。私は…両手はおひざ、口はあんぐりと幼児退行するが如くポケーッと二人を眺めるだけだ。二人だけの世界に入る勇気は私にはない。
「完成させてくれるかな」なんて言っていた自分自身がとても恥ずかしく思えてきた。『できる』若葉さんと友美に惚れ惚れする一方で、自分の不甲斐なさに辟易とした。もしかしなくても、私って必要ない？
解説が一段落し、ふーと息をついた若葉さんと目が合った。くりくりとした眼はまさにどんぐり眼という言葉がふさわしい。見た目は子ども、頭脳は大人って実在したんだ。
「すごいですね…。できる女って感じです」
若葉さんは赤くなっていく頬に手をあてた。
「え、そんなこと言われると恥ずかしいですね。私なんかまだまだひよっこで、他の職員に支えられてばかりなんで…。名前通りいつまでたっても『若葉』なんです…」
顔をふるふるとさせる若葉さん。私と友美の目が合い、お互いニヤッとなった。

「あ、そうそう私なりに神社のこと調べましたから、良ければご覧ください」
赤い顔の若葉さんは、ホチキス止めされた自前の資料をスッと机上に置いた。
「わっ！すごっ！ここまでしてくれるんだ。でも、たくさんありすぎてキャパオーバーになっちゃわない？まとめるのも若葉さんに頼もうよ」
至れり尽くせり状態に、私は甘えの言葉を友美に投げかけた。
友美は、若葉さんお手製の資料を宝の地図のように両手で持っている。
「ありがとうございます。とても助かります。では、あとは私たちで頑張ります」
「え…？」
「では、お任せしますね。何かありましたらお尋ねください」
「え…？」
あれ、また二人だけの世界に入っちゃったのかな…？二人と私の歩幅には存外、差があった。

【第三章】
「レファレンスは司書さんが答えを出してくれるわけではないんだ」
「えー、ここまで詳しいなら、いっそのこと宿題をやってもらった方がいいのにー」
脚をバタバタさせる私に若葉さんが近づいた。
「私もお手伝いはしたいです。でも、レファレンスサービスはあくまでもサポートなんです」
サポート…。私には、その言葉だけやたら大きく聞こえた。

「レファレンスは、あくまでも利用者さんのサポートであり、最終的な結論や仕上げは利用者さん自身で行うんです。極論を言うと『日本で一番高い山はどこか知りたい』という質問に『富士山です』と答えるのはレファレンスではないんです」
「その場合、若葉さんならどうします？」
友美が前のめりで聞き返した。
「そうですね…。山の標高の資料や、高山の文献を準備して提示しますかね。ただ、調べてすぐわかることでしたら、ここに載っていますって示しちゃいますかね」
「なんか複雑な感じですね」
「まあ、シンプルに利用者さんのお役に立てたらいいんですよ。本と人をつなぐのが司書の役目ですから」
若葉さんの太陽のような笑顔は、私の少しもやついた心を晴らした。
「では、やりますか」
若葉さんが退室をし、残されたたくさんの資料。これをまとめていく。そう、私たちの力で。
友美に聞きながら、私も文献の内容をまとめたり、資料を比べたりと普段動かさない頭をフルに動かした。
ふと、友美を見ると、私の三倍以上のまとめ用紙が出来ていた。見やすく綺麗な字で出来た用紙は、私の目を釘付けにすると同時に自尊心にグサリと釘刺した。私は資料の文章を写しながら
「いいよね。何でも出来るって」
と言い、ハッとして友美の顔を慌てて探した。
友美は無言のまま資料の文章を写している。

カリカリと書き写す音が緊張感を高めた。
「ごめん…」
私は、文の意味がわからないまま書き写していた。別のところに意識が行っていた。
「私さ…」
友美が呟く。大切なものを壊さないように慎重に。
「何でも出来るんじゃなくて、その逆、何にも出来ないの」
「そ…」
「何にも出来ないからこそ、努力し続けなきゃいけないの。一人だと何も出来ない。だから誰かにサポートしてもらうのが欠かせない。みんなから離れたくないから、つながっていたいから必死なんだ…」
「そんなことないよ」。私が声をかける前に、友美の言葉が出てくる。決壊したダムのように。
「バレーだって、みんながつないだボール。レシーブ、トスを受けて私がアタックして得点したい。みんなの思いを無駄にしたくないから」
声が少し震えている。すぐには友美の顔を見ることが出来なかった。
『一匹狼』。杏樹は、友美をこう呼ぶ。揶揄ではなく、私たちとは違うレベルにいると好意的に言っているようだ。でも、友美は…。背丈があって、口下手。表情も硬いから外側では冷たく見られていることがある。だけど、内面は繊細で、努力家。孤軍奮闘し、みんなを思う熱い気持ちでいっぱいなんだ。口下手や硬い表情は余裕があるからではなく、必死で戦っているからなんだ。
「真実だから、つい甘えたこと言っちゃった」
鼻をすする音がした。

「私は、真実のこと波風立てずにふわっと解決できて羨ましく思う。でも、ときどき真実が無理してないかって。だから今回宿題のサポートできて嬉しい」

バレー部に入部したとき、最初に声をかけてくれたのは友美だった。バレーがうまくて先輩にちやほやされてなんか嫌だなと思った器の小さい私に「よろしくね。一緒にがんばろう」って笑顔で話しかけてくれた。あのときと同じ笑顔の友美が私の横にいた。

私は友美と違って逃げてばかりだ。サポートするからって親切そうな言葉で逃げていた。友美みたいに自分の内側で戦わずに、外面だけ格好つけてた。

神社資料の内容がびっしり書かれたノート。友美の手の横はシャーペンの芯で黒くなっている。その資料は、若葉さんが時間をかけて探したり選んだりしたに違いない。そんな苦労の結晶を私が簡単に奪っても良いのだろうか。私はサポートするなんて偉そうなこと言って何をしたのだろう。友美のように必死で課題に取り組んだだろうか。若葉さんみたいに誠心誠意サポートしただろうか。時計の音、ペンの音が、切実に私の心を刺激していた。

「よし、これで何とかなりそう」

グッと右手を伸ばす友美。目の前には『地元の神社について』と題した提出用のノートが誇らしげに開いている。

「真実、本当にありがとう。真実がいなかったらここまで出来なかったよ」

「いや、私は何も…。ってか、ありがとうはこっちの言葉だよ。図書館で課題学習、ましてやレファレンスなんて私だけだったら一生出来ない経験させてくれたし」

「私、今日とっても楽しかった。友達っていいなって心の底から思えた」
友美、若葉さん、そして資料を作成した人。たくさんの人が関わり、つながって課題ノートが完成した。
『シンプルに利用者さんのお役に立てたらいいんですよ』。若葉さんの言葉が浮かぶ。誰かの役に立てたら。その情熱や思いを受け継ぐことが本当のサポートなのかもしれない。

【第四章】
「お疲れ様でした」
若葉さんが部屋の片づけチェックを指差し点検で行っている。この人なら…いや、この人だから。
「あの…、私がレファレンスをお願いしたいって言ったらサポートしてもらえますか。時間が全然ないかもしれないんですけれど」
若葉さんは、作業の手を止め、私に真正面の姿を見せた。小さな体がとても大きく見えた。
「もちろんです。レファレンスサービスさせていただきます」
その言葉に、私と友美は顔を見合わせフフッと笑いあった。
友美が退室届を記入していたとき、ふと若葉さんが持ってきていた本の一冊に目がいった。狼の本だ。表紙の狼はイメージと違い優しい目をしている。私はパラパラとページを捲り、ある箇所に目を奪われた。
「いくよー」
友美の声にハッとし、慌てて本を元の場所に戻す。
退室時に見た私たちの使った机は、真っすぐに並んでいた。

「ところで、何で神社を調べようと思ったの？」
図書館の帰り道、私の真横に並ぶ友美に尋ねた。
「毎日、傍を通るけど何も知らないなってふと思ったんだ。知ってるようで何も知らないのって寂しいなって」
傍にあるのに…か。
調べた資料にあった。
歌人・西行法師が伊勢神宮に出かけたときに詠んだ歌
『なにごとの　おはしますかは　知らねども　かたじけなさに　涙こぼるる』
（ここにどんな神様がお祀りされているかはわからないが、ありがたい感じがして自然と涙が出てくる）
地元の神社は、あまりにも身近なため、なぜそこに神社があるのか意識する機会なく過ごしがちである。知識が増えると神社やご祭神がより身近に感じられ、参拝のときにはその神様に心の中で語りかけてみたくなる。願い事を述べるだけではなく、日々の感謝の気持ちも伝えたくなる。
いつも何気なく傍を通っていた小さな神社に壮大な歴史があり、いかに人々に愛されてきたのか、レファレンスのおかげで知ることが出来た。
ちらりと友美の横顔を見る。少し紅潮した頬、落着して僅かに緩む口元。いつもより距離が近く感じる。
「友美ってもっと余裕綽々（しゃくしゃく）で生活しているって思ってた。でも、そうじゃなくて必死にしてるって初めて知ったよ」
「私も真実って全体を見て考えて行動してるとばかり思ってた。私らを掌で転がしているイメージだった」

「現実は、私がつまづいて転んでばかりなんだけどね」
一匹狼。狼って好んで単独で行動しているんじゃない。新しいパートナーや居場所を探しているんだ。怪我をした仲間がいれば食べ物を運び、面倒を見る自己犠牲を伴う優しい面もあるんだ。
若葉さんが持ってきたあの本は…。いや、単なる偶然だよね。
フワッと風が吹いた。青く爽やかな草木の匂いがする。
「あ、ここ調べた神社じゃん。ちょっとお参りしていこ」
私は、テーピングをしている友美の大きな手を握って参道に駆けた。この神社の御利益が縁結びだということは調べないと知ることもなかっただろう。
ありがとう。

【エピローグ】
この図書館に来たのはいつぶりだろうか。大きなガラス板の重い扉を押した。全体が一度に見渡せるぐらいの小さな規模だ。中には新聞を読んでいるお年寄りが二人。
「こんにちは」
私に気づいた職員さんが少し目を大きくして挨拶した。
うっ…。やはり場違いだったかな…。学校帰りだったため制服なのも私の存在を目立たせている。やっぱり、前みたいに若葉さんにするべきだったかな…。いや、でも、でも…。
踏ん切りがつかず、もじもじしていると奥から初老の職員さんが「今日は、どうなさいました?」とにこ

やかな顔で話しかけてきた。
「レ、レファレンスをお願いしたくて…」
少し上ずった声に、初老の職員さんはますます顔を緩めて言った。
「どうぞ、レファレンスサービスさせていただきます」

《参考文献》
◆大串夏身『レファレンスと図書館』皓星社　二〇一九年
◆奥野宣之『図書館「超」活用術』朝日新聞出版　二〇一六年
◆本間美加子、平藤喜久子『神社の解剖図鑑2』エクスナレッジ　二〇一七年

比那名居ななひさんの１作目『館入娘』は
以下の二次元コードから読むことができます。



マミレファシル

2026 年 10 月 24 日　発行

著者　比那名居（ひなない）　ななひ

令和８年度 函南町立図書館８月～11 月ＹＡ展示・企画冊子
編集・発行　函南町教育委員会教育部生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

いつもサポートする側の真実。夏休みの宿題が終わらず困っていると同じ部の友美が図書館に誘ってくれた。そこで真実はレファレンスサービスを知る。友美、司書の若葉のサポートを受けて自分の答えを見つけていく。